

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 87

泉 亮之

—まいばらの先人⑨—

四合目の日本武尊像

伊吹山頂に登ると多くの人が記念撮影をする日本武尊像は、明治四五年六月に愛知県御嶽照王会が建てたもので、岐阜県の石工が製作しました。明治末から大正にかけて、伊吹山で日本武尊を顕彰する動きがあったように、四合目の高屋には、大正九年に柏原の亀屋左京が寄進した石の祠があります。ここは「日本武尊遭難の地」。タケルが、伊吹の神が化身した白い大猪にであつたところから、この祠には、当時、木彫の日本武尊像が納められていました。ぼつちやりとした丸い顔ですが、片手に草薙剣を握りしめた凛々しい姿です。台座の裏には「江州坂田郡番場之住艸奔臣八十二翁 蟾亭亮之 謹刻」とあります。いまこの像は、地元上野区で大切に保管されています。

”蟾亭亮之”とは、番場の彫刻家泉

亮之のことです。八二歳のときのこの作品は、大正九年、祠に安置するために彫られたもので、亮之は同年に亡くなっていることから晩年の優品ということが出来ます。この作品を作るために全国各地のタケル像を見て歩き、金沢兼六園の像からイメージを膨らませたと、地元では伝えられています。

神業の鬮腰

亮之がその号とした「蟾」とはヒキガエルのことで、その名のとおりガマの彫刻が巧みで、蛇の作品もよくし、鬮腰にいたつては「其の技神に入り、人皆之を珍重す」と『改訂近江國坂田郡志』は絶賛しています。

天保九年（一八三八）、番場に生まれ、幼いときから審美眼に優れ、好んで彫刻をして見る人を驚かせたといわれています。二五歳のとき商いに従事

し、濃飛両国（岐阜県）を訪れ、たまたま飛騨高山の亮永の彫刻に接して、その真に迫る様に感動し、このときすでに亮永は故人となつていましたが、隔世の師と仰いで自ら亮之と名乗りました。番場に帰り、日中、田畑にいるときも、夜、商いのかたわらにも、雅の技を極め、飽くことなく彫刻の術に注いで、明治一〇年頃には名声がいよいよ高まって、多くの人が亮之を訪ねました。どんなものでもひとたび目にすれば、たちまちその形態を彫りあげ、見る人がその真偽を疑うほどの出来だったそうです。その作品は、数々の博覧会に出品され、謝状や賞牌（メダル）を受けることおびただしい数にのぼります。

明治二四年「蛇纏鬮腰の図」をロシア皇太子（のちの皇帝ニコライ二世）にご覧いた

だき買い上げられ、二六年四月にワシントンで開かれた世界博覧会で受賞、シカゴのコンブス上陸四百年祭記念世界博覧会では「鬮腰蛇」

「蟾蛇」を出品して賞牌を授与されるなど、その妙技は海外でも披露されました。明治三年の皇太子御成婚を祝して「繡眼児雄雌置物竹籠入」を納めるよう命を受けます。大隈重信は贈呈された「蛇纏の杖」をことのほか愛用しました。亮之は、鬮腰を極めるために自ら鋏を持つて古墳を掘り、そこで得た完全な頭骨を常に座右に備え、さらに、医師を招いて解剖を依頼し、骨肉の関係や筋のつながりなどを精密に探究して、真に迫る技を極めたといえます。

伊吹山文化資料館（電話五八一〇二五二）では、今秋、泉亮之を紹介する企画展を計画しています。出身地の番場を中心に亮之やその系譜をひく作品が残されていると思います。ぜひお知らせください。

（歴史・文化財保護室）



▲ 木彫 日本武尊像